

【伽羅色(きゃらいろ)】柔らかな黄褐色。

香木の伽羅で染めた色が色名の由来。香木は芳しい香りをもつ木材のことで、植物そのものが香る半寄生の熱帯性常緑樹の白檀(びやくだん)とジンチョウゲ科の常緑樹の樹脂が長い年月によって変質し、独特の香りを放つようになった沈香(じんこう)がある。沈香の中で特に質の良いものが伽羅と呼ばれ、正倉院に伝わる長さ156cm、最大径43cmの伝説の名香「蘭奢待」を巡って天下人たちが争奪戦を繰り広げた。

●目次／contents

今月のニュース	2
令和4年度「市町村立美術館活性化事業」スタート	
財団からのお知らせ	4
ステージラボ川崎セッション開催のお知らせ	
令和4年度「リージョナルシアター事業」スタート	
今月の情報	5
地域通信／アーツセンター情報	
制作基礎知識シリーズ Vol.51	10
変化する地域と越境する文化の役割～「地域と文化芸術をつなげるコーディネーター インタビューによる事例調査」から	
今月のレポート	12
青森県青森市 青森公立大学 国際芸術センター青森[ACAC]	
景観観察研究会「八甲田大学校」	

●令和4年度「市町村立美術館活性化事業」

「土門拳—肉眼を超えたレンズ—」展を開催

令和4年度 市町村立美術館 活性化事業 スタート

写真
左：安曇野市豊科近代美術館でのワーク
ショップ「空き箱でカメラオブスキュラ」の
様子
右：直方谷尾美術館での展示の様子

●令和3・4年度市町村立美術館活性化事業 第22回共同巡回展「土門拳記念館コレクション展 土門拳—肉眼を超えたレンズ—」

- 安曇野市豊科近代美術館(長野県安曇野市) 5月29日～7月10日
- 直方市美術館(福岡県直方市) 7月17日～9月4日
- 安来市加納美術館(島根県安来市) 9月10日～10月24日
- 八幡浜市美術館(愛媛県八幡浜市) 10月29日～12月11日

[アドバイザー]
藤森武(土門拳記念館学芸担当理事)
[開催協力館担当学芸員]
田中耕太郎(土門拳記念館学芸員)

●市町村立美術館活性化事業に関する
問い合わせ
総務部 高野
Tel. 03-5573-4184



「市町村立美術館活性化事業(市美活)」の22回目となる巡回展「土門拳記念館コレクション展『土門拳—肉眼を超えたレンズ—』」が、長野県の安曇野市豊科近代美術館を皮切りに5月29日より開幕し、7月17日より福岡県の直方市美術館(直方谷尾美術館)で開催いたしました。この展覧会では、山形県酒田市の土門拳記念館から所蔵作品をお借りし、激動の昭和を独特のカメラアイで切り取り、日本の写真界に大きな足跡を残した写真家・土門拳の代表作を紹介しています。直方谷尾美術館での展示の後には、9月10日より島根県の安来市加納美術館、10月29日より愛媛県の八幡浜市美術館へと巡回します。

今回のニュースでは、巡回展の開幕に合わせて、市美活のスキームについてご紹介します。

●実行委員会形式で巡回展を準備

市美活は、企画・制作能力の向上、連携の促進、所蔵作品の利活用等を図るため、中核的な美術館からコレクションを借用し、市町村立の美術館が共同で開催する巡回展と、展示内容に合わせたギャラリートークやワークショップ等「地域交流プログラム」を実施するものです。

巡回展の企画のテーマは、地域創造の美術事業における諮問機関である「公立美術館活性化事業企画検討委員会」(公立美術館館長や学芸員、専門家から構成)と相談し、決定した企画を提示して参加館を募集しています(右図参照)。今回は土門拳記念館から貸出協力を受けることに決定し、それぞれの地域や顕

彰作家などが土門拳にゆかりのある4館が参加しました。

集まった4館は、共同巡回展実行委員会を設立し、コレクションの貸出協力館である土門拳記念館の学芸担当理事、学芸員のお二人に助言をいただきながら、令和3年度から学芸会議を重ね開催に向けて準備をしてきました。

●小規模美術館の活動の可能性を広げる市美活

市町村立美術館には、学芸員数、予算面の制約や、収蔵品も幅広く集められていないという課題があり、市美活はこうした課題に向き合うものでもあります。

令和3・4年度市美活の参加館である直方谷尾美術館の学芸員・市川靖子さんは、「当館としても巡回展自体が初めての試みでしたが、輸送費等の問題で単館ではできない規模の企画となり、貴重な経験になりました。市美活では、準備段階の調査旅費や会議出張旅費も助成対象経費となるので、土門拳記念館へ事前に出張して作品の調査ができたことも、展示プランの構想に役立ちました」と話しています。直方谷尾美術館では、土門拳が福岡県で取材をした『筑豊の子どもたち』シリーズの作品を他館よりも多く展示しました。来館者の中には、被写体となった子どもを知っている方や撮影場所に実際に住んでいた方も見受けられ、懐かしそうに作品を鑑賞する姿もありました。

市川さんは「展覧会の半券提示で商店街の商品が割引になるなど、地域との協力を促すことができました。また、市役所の協力で駅前に

▼— 今月のニュース

地域創造からのニュースを毎月掲載します

展覧会の横断幕を貼ることができ、効果的な宣伝ができたため、普段の展示よりも来館者が多く、反響も大きいと感じています。展覧会の規模が大きく、県外からも多くの人が視察に来ることで、市役所内部の美術館の現状への認識が高まるといった効果もあると思います。展覧会を機に照明器具の不足や設備面の不安など、展示と作品保護に必要な条件が整っていないことを知ってもらえたらいいと考えています」と将来への期待も話していました。

●各地の学芸員が協働することで生まれる企画

市美活に参加することで、人材育成や各地の美術館とのネットワークをつくることもできます。展覧会の準備作業であるカタログの制作や広報、作品の輸送など業務は各館で分担するので、これまで経験のない業務にチャレンジしたり、各館のノウハウを学ぶこともでき、スキルアップの機会になります。展覧会の企画についても、募集する際にテーマや貸出協力館は決まっていますが、企画の詳細を詰めていく際には参加各館で意見を出し合いながら具現化していきます。

「市美活は初めてだったので事務的にわからないこともありましたが、実行委員会の事務局館である八幡浜市美術館の学芸員がサポートをしてくれて助かりました。普段は福岡県内の美術館としか交流がありませんでしたが、市美活を通じて他県の学芸員と知り合えて、共同で企画を行ったのはとても良い経験になりました」と、市川さんは参加館同士の交流についても話していました。

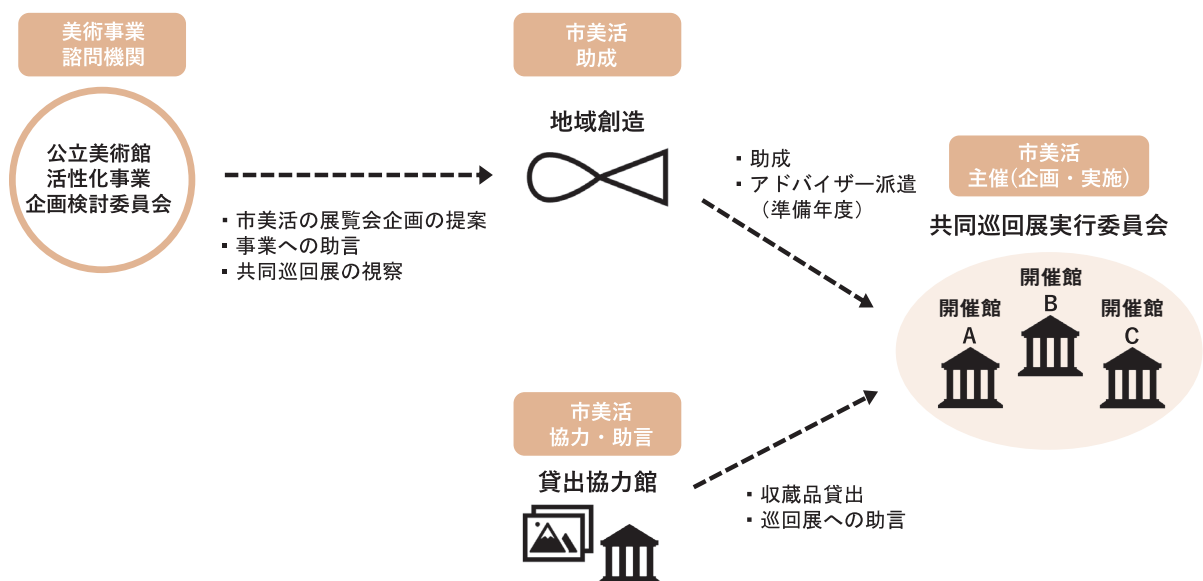
※

開催館の近くへお越しの際は、ぜひ「土門拳展」をご覧ください。

また、令和5・6年度市町村立美術館活性化事業「熊本県立美術館所蔵 浜田知明展(仮称)」の参加館を現在募集しています(11月30日締切)。熊本県立美術館は、開館当初から郷土を代表する芸術家のひとりとして浜田知明を位置づけ作品を収集してきたため、浜田知明の銅版画と彫刻に関してはほぼすべてを網羅しています。加えて、若き日に制作したデッサンや油彩画も所蔵しているため、熊本県立美術館のコレクションでその画業と生涯をたどることが可能です。ご興味のある館のご参加をお待ちしています。

●令和5・6年度市町村立美術館活性化事業の募集については実施要綱をご確認ください。当財団ホームページからダウンロードできます。
<https://www.jafra.or.jp/project/visual-art/01.html>

●市町村立美術館活性化事業(市美活) スキーム



▼財団からのお知らせ

地域創造からのお知らせを毎月掲載します

財団からのお知らせ

●「ステージラボ」に関する問い合わせ
芸術環境部 梅村・藤原
Tel. 03-5573-4066

●令和4年度リージョナルシアター事業
(参加団体/派遣アーティスト)
●山形県鶴岡市(タクトつるおか共同企業体/福田修志)
●山形県酒田市(酒田市/田上豊)
●福島県白河市(NPO法人カルチャーネットワーク/多田淳之介)
●神奈川県横浜市(かんないアート&メディアパートナーズ/福田修志)
●静岡県島田市(島田市/有門正太郎)
●大阪府泉大津市(泉大津市/ごまのはえ)
●徳島県((公財)徳島県文化振興財団/有門正太郎)
○アドバイザー
●内藤裕敬(劇作家・演出家、南河内万歳一座座長)
●岩崎正裕(劇作家・演出家、劇団太陽族代表)

○派遣アーティスト情報



https://www.jafra.or.jp/system/artists/index?genre=301®istered_year=2021

○問い合わせ
芸術環境部 栗林・薬科
Tel. 03-5573-4124

※お詫びと訂正
前号(9月号)[今月のニュース]の写真キャプションに以下の誤りがございました。お詫びして訂正させていただきます。
P2 長井江里奈さん

↓
浅井信好さん

●ステージラボ川崎セッション開催のお知らせ

ステージラボは、公立文化施設等の職員を対象として、事業の企画制作、施設運営、地域との関わりなど、ホール、劇場等のソフト面の運営に欠くことのできない要素を体得するため、ワークショップ等体験型プログラムやグループディスカッションなど、講師と参加者の双方向コミュニケーションを重視したカリキュラムに取り組む、少人数ゼミ形式の実践的な研修事業です。

令和4年度の後期セッションは、ミュゼ川崎シンフォニーホール(川崎市)にて2コースで開催します。詳細や参加者募集は、次号の地域創造レターおよび当財団ホームページでお知らせします。

◎ステージラボ川崎セッション概要

【日程】2023年2月14日(火)～17日(金)

【会場】ミュゼ川崎シンフォニーホール

(神奈川県川崎市幸区大宮町1310)

【開講コース(予定)と対象となる職員の目安】

●ホール入門コース

公立文化施設で企画・運営に携わる職員および地域の文化・芸術に携わる地方公共団体職員で、公共ホール・劇場において業務経験年数1年半未満の方。

●自主事業コース

公立文化施設で企画・運営に携わる職員および地域の文化・芸術に携わる地方公共団体職員で、自主企画による事業を実施している公共ホール・劇場において業務経験年数が2～3年程度の方。

※新型コロナウイルス感染症等への対策を講じた上で実施いたします。

※新型コロナウイルス感染症等の影響により、開催内容が変更となる場合がございます。

●令和4年度「リージョナルシアター事業」がスタート

演出家等を公共ホール等に派遣し、ホール職員等と共にアウトリーチやワークショップを企画・実施するリージョナルシアター事業。この事業では、演劇の幅広い可能性について、ホール職員等の理解を深め、演劇の手法を用いて地域活性化の試みを後押しすることを目的としています。今年度は7団体が参加し、まちの規模もミッションもさまざまな中で、担当者が派遣アーティストと対話を重ねながら企画した事業が、順次スタートしました。

泉大津市では小学校でのアウトリーチと、昔の小津地域の日常風景の写真から物語を想像して短い脚本をつくるワークショップ、その脚本に民族楽器や手づくり楽器で効果音を付けて朗読劇を演じるワークショップを実施しました。公募で集まった多様な世代の参加者が、自由な発想でつくり上げる姿が印象的でした。参加者からは「来年も絶対やってほしい」という声が上がリ、ホール担当者も「世代間交流となり良かった」と手応えを感じておられました。

酒田市では、「交流」をテーマに、庄内地域の高校演劇部や市役所・関係団体職員、庄内地域の市民演劇団体それぞれを対象に実施するプログラムを企画しました。市役所・関係団体職員に向けたワークショップでは、庁内の各部署(企画調整課、子育て支援課、福祉企画課など13課)や美術館職員などが集まり、普段あまり交流が

ない部署と交流し、各部署の課題やアイデアなどを共有することで、地域づくりの可能性の気づきとなるようにとの思いをもって実施しました。4人1組となり、台本の空白部分とその背景を考えるという短編作品づくりでは、アイデアを出し合いながら協力することで、お互いの新たな一面を知るとともに、創作することの面白さや想像の多様性を体験することができたと思います。

参加者からは「“想像”がどのような業務においても重要だと感じた」「今回の演劇を通じたワークショップの手法を、今後の業務に活かしたい」などの感想がありました。

他地域でも、地域資源を活用した取り組みなどが実施されますので、興味のある方はぜひご視察ください。



あすとホール(大阪府泉大津市)で実施した朗読劇「写真でつむぐ 小津ものがたり」発表会の様子

▼ 今月の情報

アーツセンター、アーツクルーから寄せられた情報を毎月掲載します

地域通信

● 地域通信欄掲載情報について
最新の情報は主催者の発表情報をご確認ください。

● データの見方
情報は地域ブロック別に、開催地の北から順に掲載してあります。●で表示してあるのは開催地です。📍マークが付いている事業は地域創造の助成事業です。ラインの下は、事業運営主体、住所、電話番号、担当者名の順に記載してあります。色帯部分が事業名で、以下、内容を紹介しています。

● 地域ブロック
[北海道・東北] 北海道、青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島
[関東] 茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川
[北陸・中部] 新潟、富山、石川、福井、山梨、長野、岐阜、静岡、愛知
[近畿] 三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山
[中国・四国] 鳥取、島根、岡山、広島、山口、徳島、香川、愛媛、高知
[九州・沖縄] 福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄

● 情報提供先
ファックス、電話、e-mailでお願いします。
Fax. 03-5573-4060 Tel. 03-5573-4066
letter@ajfra.or.jp
地域創造情報担当 梅村・矢嶋

● 2022年12月号情報締切
10月25日(火)

● 2022年12月号掲載対象情報
2022年12月～2023年3月に開催もしくは募集されるもの

北海道・東北

● 岩手県岩手町

石神の丘美術館
〒028-4307 岩手県岩手町大字五日市10-121-21
Tel. 0195-62-1453 齋藤桃子
<https://ishigami-iwate.jp>

抗う波の軌跡 浮島彫刻スタジオの30年

彫刻家の片桐宏典とケイト・トムソンは、自然豊かな岩手町浮島地区に彫刻スタジオを設立し、共同で作品制作・アートプロジェクトの開催に関わってきた。2006年からはスコットランドにも制作拠点を広げ、さまざまなジャンルとのコラボレーションを企画し、時代を超えたアートと社会の形を目指している。本展では開設30周年を迎えた浮島彫刻スタジオのこれまでの歩みを作品や資料とともに振り返る。

[日程] 9月10日～10月30日
[会場] 石神の丘美術館



片桐宏典《ウォーター・マーク～北上川の四季》(2003年)

● 秋田県横手市

秋田県立近代美術館
〒013-0064 横手市赤坂字富ヶ沢62-46 (秋田ふるさと村内)
Tel. 0182-33-8855 鈴木京
<https://common3.pref.akita.lg.jp/kinbi/>

秋田蘭画の世界 『解体新書』から『不忍池図』へ

江戸時代の武士・小田野直武(1749～80)や佐竹義敦(1748～85)らは、秋田藩において西

洋の表現を取り入れた「秋田蘭画」と呼ばれる新感覚の絵画を描き、高い評価を得ている。本展では、各地に所蔵される秋田蘭画の名品と関連資料を含めた約130点により、本草学者・平賀源内の来藩に始まる秋田蘭画の誕生と創造の道のりを紹介する。会期中には特別講演会のほか、手話通訳付帯ギャラリートークも開催。

[日程] 前期: 9月17日～10月16日 / 後期: 10月19日～11月13日
[会場] 秋田県立近代美術館



小田野直武《不忍池図》(重要文化財/江戸時代 18世紀/秋田県立近代美術館蔵) ※前期展示

● 福島県白河市

白河文化交流館コミネス
〒961-0075 白河市会津町1-17
Tel. 0248-23-5300 祓川徳子
<http://cominess.jp/>

白河まちなか音楽3Days 2022

コミネスや白河のまちなかに会場を設け、歴史ある街を感じながら気軽に音楽にふれることができる音楽祭。メインとなるコミネスでのホール公演には、ショパン国際ピアノ・コンクールの日本人受賞者3名(山本貴志、高橋多佳子、宮谷理香)が登場。ショパンの名曲を披露する。そのほか、3日間を通してクラシック、ジャズ、邦楽など幅広いジャンル、スタイルの音楽を身近に堪能できる。

[日程] 10月8日～10日
[会場] 白河文化交流館コミネス、白河駅前イベント広場、楽蔵、藤屋蔵ほか

関東

● 茨城県小美玉市

小美玉市四季文化館みの～れ
〒319-0132 小美玉市部室1069
Tel. 0299-48-4466 原田啓司
<http://minole.city.omitama.lg.jp/>

みの～れ20歳記念オリジナル 住民ミュージカル『黄色い袋と魔法のトンネル』

小美玉市を拠点に、住民主役による劇場運営、芸術文化創造活動の発信と次代の育成を目的に活動している演劇ファミリーMyu。小学1年生～70歳代まで幅広い世代が参加し、脚本や演出、舞台美術なども自ら手掛けたオリジナルミュージカルを上演している。今回はみの～れ開館20周年記念公演として、地元の遠州池を舞台とした勇気と友情の冒険ファンタジーを上演する。
[日程] 10月15日、16日
[会場] 小美玉市四季文化館みの～れ

● 茨城県北茨城市

茨城県天心記念五浦美術館
〒319-1703 北茨城市大津町椿2083
Tel. 0293-46-5311 塩田和雄
<https://www.tenshin.museum.ibk.ed.jp/>

開館25周年記念展Ⅲ 再興展の立役者 齋藤隆三

開館25周年記念展の第3弾。守谷市出身の歴史家で、大正3(1914)年の日本美術院再興に際して発起人となった齋藤隆三にスポットを当てる。初公開を含む齋藤旧蔵品を中心に、再興日本美術院の歴史を彩った横山大観や下村観山、菱田春草をはじめ、日本美術院の歴史を彩った画家たちの代表作を展示。また、隆三の歴史家としての業績や、彼の愛した水戸ゆかりの近世絵画なども合わせて紹介する。隆三の令孫で日本画家の齋藤竜太を講師に迎えた日本画

実技講座も予定。
[日程] 10月8日～11月27日
[会場] 茨城県天心記念五浦美術館

●群馬県太田市

太田市美術館・図書館
〒373-0026 太田市東本町16-30
Tel. 0276-55-3036 山田晃子
<https://www.artmuseumlibraryota.jp/>

津田直+原摩利彦 トライノアシオト—海の波は石となり、丘に眠る

太田市美術館・図書館では地域の文化芸術を取り上げた展覧会を継続して実施しており、今回は写真家・津田直と音楽家の原摩利彦が、群馬に現存する古墳を中心にフィールドワークし、共作で生み出したインスタレーションを展示する。館内3カ所で音と写真によるインスタレーションを展開するほか、アーティストが制作のエピソードを語る映像も展示する。

[日程] 8月27日～10月30日
[会場] 太田市美術館・図書館

●千葉県市川市

市川市文化振興財団
〒272-0826 市川市真間5-1-18
Tel. 047-374-7687 田所久仁子
<https://www.tekona.net/yoshizawa/>

石井光智 電車の顔 Train's Face

多くの鉄道イラストを制作しているイラストレーター・石井光智に焦点を当てた初の展覧会。石井の緻密で精巧なイラストは、細部にわたり洗練された作品群として、観る者の心を魅了する。展覧会では、「電車の顔」の作品を中心に、制作過程も併せて紹介するほか、京成電鉄の「旧博物館動物園駅的设计図」やヘッドマークなどの鉄道資料も展示し、大人も子どもと一緒に電車

の世界を楽しめる。
[日程] 9月9日～10月16日
[会場] 芳澤ガーデンギャラリー

北陸・中部

●山梨県甲府市
山梨県立美術館
〒400-0065 甲府市貢川1-4-27
Tel. 055-228-3322 平林彰
<https://www.art-museum.pref.yamanashi.jp/>

縄文—JOMON—展

縄文時代の遺跡や土器が多く発見されていることで「縄文王国」として知られる山梨県。本展では縄文土器や土偶の造形美に着目し、考古学的ではなく美術的視点から紹介する。山梨県立考古博物館など各所に所蔵されている土器や土偶を一堂に展示するほか、縄文美術を40年以上撮り続けた写真家・小川忠博による縄文遺物写真や展開写真をコラボレーションさせ、かつてない視点と展示方法で縄文美術の魅力を伝える。

[日程] 9月10日～11月6日
[会場] 山梨県立美術館

●長野県長野市

長野市文化芸術振興財団
〒380-8512 長野市大字鶴賀緑町1613
Tel. 026-219-3100 長谷川綾
<https://www.nagano-arts.or.jp>

長野市芸術館 凱旋コンサート・シリーズ Vol.7

信州3男子 ピアノ・バトルⅢ

長野で生まれ育った演奏家たちが故郷に凱旋するシリーズ。松橋朋潤、梨本卓幹、久保亮太の3人のピアニストが3台のピアノを同時演奏するバトル・ステージの3回目。ピアノを囲むように客席を配置することで、通常のコンサート以上に演奏者のエネルギーや息遣いまでダイレクトに伝わり、ライブハウスのような感覚で迫力ある演奏を味わえる。

[日程] 10月1日
[会場] 長野市芸術館 アクトスペース

●長野県松本市

松本市芸術文化振興財団
〒390-0815 松本市深志3-10-1
Tel. 0263-33-3800 小川・西川
<https://festamatsumoto.com/>

FESTA松本2022

FESTA＝お祭りとは、「決して裕福な時だけ行うのではなく困難な時にこそ、生き方を見つけ出すために行うのが本来の役割ではないか」というまつもと市民芸術館総監督・串田和美の考えの下、2021年から始まった「演劇的」フェスティバル。市内の劇場やさまざまな場所を会場に、串田のライフワークとも言える『スカパン』、長塚圭史演出の『夜の女たち』、南シベリアに伝わる喉歌「ホーメイ」のコンサートなど、多彩な公演を開催する。

[日程] 10月1日～10日
[会場] まつもと市民芸術館、信毎メディアガーデン、上土劇場、松本市内各所

●岐阜県岐阜市

岐阜市民芸術祭実行委員会
〒500-8521 岐阜市橋本町1-10-23
Tel. 058-268-1050 富田竜
<https://gikyobun.or.jp/heartful/shogaigakushu/bunka/2022.html>

ぎふ演劇シーズン2022

観劇文化が成熟した欧米で行われている「演劇シーズン」にあやかり、地元の良質な舞台を気軽に楽しみ、豊かな芸術文化環境の創出を目指す演劇祭。今回は岐阜市を中心に活動している6劇団が、9～12月にかけて市内の各施設で公演する。ハシゴ券によるキャッシュバックで複数公演をお得に観劇できる取り組みや、タブレット等による字幕公演も実施。

[日程] 9月10日～12月11日
[会場] みんなの森 ぎふメディアコスモス、御浪町ホールほか

●静岡県

静岡県立美術館
〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
Tel. 054-263-5755 加藤小百合
<https://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp/>

絶景を描く —江戸時代の風景表現—

当館または個人所蔵作品などから、江戸時代に各地の絶景を描いた珠玉の作品が集結。富士山をテーマにした2つの大作、原正《富士山図巻》(個人蔵)と歌川広重《不二三十六景》(当館蔵)も展示し、作品の特徴を比較しながら鑑賞できる。一部の展示作品は、題材となった全国各地の風景描写について、学芸員が現地に赴いて調査した結果も交えて紹介する。

[日程] 9月10日～10月23日
[会場] 静岡県立美術館

●静岡県森町

森町文化会館ミキホール
〒437-0215 周智郡森町森1485
Tel. 0538-85-1111 村松達雄
<https://www.town.morimachi.shizuoka.jp/bunka/index.html>

フルート・二胡・ピアノで巡る世界音楽紀行

静岡県出身のアーティスト古川はるな(フルート)、鈴木裕子(二胡)、奥村友美(ピアノ)による、ヨーロッパから日本まで各大陸の音楽を巡るコンサート。森町でもっと音楽を身近に感じてほしいとの思いを込めて、クラシックの名曲や映画音楽のアレンジなど親しみやすい内容で音楽の旅へ誘う。地元の中学生100人を無料招待し、次世代が芸術にふれる機会も創出する。

[日程] 10月2日
[会場] 森町文化会館ミキホール

▼ 今月の情報

アーツセンター、アーツクルーから寄せられた情報を毎月掲載します

●名古屋市



やっとかめ文化祭実行委員会
〒460-0011 名古屋市中区大須3-42-30 ALA大須ビル201
(NPO法人大ナゴヤ・ユニバーシティー・ネットワーク内)
Tel. 052-262-2580 大野嵩明
<https://yattokame.jp/>

やっとかめ文化祭 ～芸どころ・旅どころ・なごや～

尾張徳川家の下で優れた伝統文化を育み、“歴史”と“文化”が息づく名古屋の伝統文化を市内一円で体感できるフェスティバル。10周年の今年は、歌舞伎や能・狂言、邦楽、雅楽など伝統芸能の公演や道端に眠るまちの物語を見つける「まち歩き」など、70以上の多彩なプログラムを展開。名古屋のさまざまな事柄を学ぶ講座「まちなか寺子屋」も多数開催される。
[日程] 10月22日～11月13日
[会場] 名古屋市内一円

●愛知県長久手市

長久手市文化の家
〒480-1166 長久手市野田農201
Tel. 0561-61-3411 福島梓
<https://bunkanoie.jp/>

Nagakute Nature-Centered Project ハイキングコンサート2022 ～森のなかに音楽が、しみわたる。

東京大学先端科学技術研究センター先端アートデザイン分野の協力のもと実施される、自然の中を歩きながら生演奏を聴く新しい体験型アクティビティ。長久手市の西部は名古屋市に隣接し都市化が進んでいるが、東にかけては田園風景が広がる地域である。参加者は約4kmのコースを歩きながら、途中の河川敷や神社など3カ所のポイントで、弦楽五重奏や木管五重奏、金管五重奏による演奏を楽しむことができる。

[日程] 10月30日
[会場] 色金山歴史公園ほか長久手市内約4kmのコース

近畿

●三重県津市

津市久居アルスプラザ
〒514-1136 津市久居東鷹跡町246
Tel. 059-253-4161 真嶋陽
<https://www.tsuhisai-ars.jp/>

アルスこども創造プロジェクト2022 『久居のものがたり』

将来の文化芸術を牽引する人材育成を目指し、地域の芸術家の指導の下、子どもたちと共に創作活動を行う「アルスこども創造プロジェクト」。昨年度はワークショップの実施に留まったが、今年度は久居藩初代藩主・藤堂高通を通して、350年前につくられた「久居」に現在の子どもたちが思いをめぐらせる市民創作ミュージカルを上演する。関連企画として、出張型の体験ワークショップも行われる。

[日程] 10月10日
[会場] 津市久居アルスプラザ



昨年度ワークショップの様子

●三重県四日市市

四日市JAZZフェスティバル実行委員会
〒510-0075 四日市市安島2-5-3 (四日市市文化会館内)
Tel. 059-354-4501 田中峻
<http://yokkaichi-jazz.com/>

第9回四日市JAZZ FESTIVAL 2022

街のにぎわいを創出し、自由に音楽にふれあいながら、「音楽の街・四日市」をつくり上げたいと2012年スタートした音楽イベ

ント。ジャズだけでなく、幅広いジャンルを対象とした76組のバンドが市内13会場で演奏を披露する。メインゲストに地元三重を拠点に全国で活動する中村好江(トランペット)を迎え、この日限りのスペシャルバンドが四日市を音楽で盛り上げる。
[日程] 10月15日、16日
[会場] 四日市市内各所

●京都府宮津市、福知山市、向日市

京都府文化スポーツ部文化芸術課
〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入薮ノ内町
Tel. 075-414-4287 辻村英那
<https://2022.alternative-kyoto.jp/>

京都府域展開アートプロジェクトALTERNATIVE KYOTO 2022

2019年から京都府北部・中部・南部エリアで展開しているアートプロジェクト。宮津・天橋立の元伊勢籠神社では、Iregularによる4m×4mの作品を日本初公開。このほか、福知山は、福知山城、新町商店街で、向日市は、向日神社で、地域の文化資源の魅力を引き出したデジタルアートなどを展示し、観光や地域経済の活性化を目指す。
[日程] 9月9日～11月20日
[会場] 宮津市(天橋立公園、元伊勢籠神社ほか)、福知山市(福知山城公園ほか)、向日市(向日神社ほか)

●神戸市

神戸アートビレージセンター
〒652-0811 神戸市兵庫区新開地5-3-14
Tel. 078-512-5500 平川・山本
<https://kavc.or.jp/>

神戸アートビレージセンター(KAVC)プロデュース公演手話裁判劇『テロ』

近年、手話言語を使った作品を発表している演出家・劇作家ピンク地底人3号の演出で、フェ

ルディナント・フォン・シーラッハによる裁判劇『テロ』を、公募オーディションで選ばれたろう者や難聴者、聴者、視覚障がい者による手話劇として上演。命を天秤にかけることはできないという命題の下、人間の倫理を問う法廷を描いた裁判劇で、身体的なハンデをもつ人々への情報保障を、演劇公演にどう取り入れるかを模索する。

[日程] 10月5日～10日
[会場] 神戸アートビレージセンター KAVCホール

●兵庫県伊丹市

AI・HALL (伊丹市立演劇ホール)
〒664-0846 伊丹市伊丹2-4-1
Tel. 072-782-2000 土倉征子
<https://www.aihall.com/>

「地域とつくる舞台」シリーズ いたみ・まちなか劇場『味わう舞台 Vol.4』

伊丹の個性豊かな飲食店を会場に、美味しい料理とアイホール選りすぐりのお芝居がセットでお得に楽しめるシリーズ。市民に長年愛されるカフェ・レストラン「cafe Mon」では、伊丹で実際にあったエピソードを元に描いた『イタミ・ノート』(出演: 高安美帆/作・演出: ごまのはえ)を、老舗のお茶専門店「みどり園 本店」では藤沢周平の傑作短編『驟り雨』を朗読劇として上演(演出・出演: 林英世)。眼にも口にも“満腹”な一日をお届けする。
[日程] 10月20日、11月3日
[会場] cafe Mon、みどり園 本店



『イタミ・ノート』(2020年10月/イタリアンレストラン アントン)

▼— 今月の情報 (アーツセンター編)

新たにオープンした公立のアーツセンターを紹介します

アーツセンター情報

●データの見方

情報は所在地の北から順に掲載しています。●で表示してあるのはアーツセンターの所在地です。以下名称、住所、電話番号、公式サイトURLを記載しています。また、基礎データとして、設置者、運営者、ホール席数など施設概要を紹介しています。

●情報提供のお願い

地域創造では、地域の芸術環境づくりを積極的に推進するアーツセンター(ホール、美術館などの施設のほか、ソフトの運営主体も含みます)の情報を収集しています。特に、新規の計画やオープンなどのトピックスについては、この情報欄に掲載していく予定です。このページに掲載を希望する情報がございましたら、情報担当までご連絡ください。

●情報提供先

地域創造レター担当
Fax. 03-5573-4060
Tel. 03-5573-4066
letter@jafra.or.jp

●新潟県五泉市

五泉市交流拠点複合施設 ラポルテ五泉

〒959-1821 五泉市赤海863
Tel. 0250-41-1612
<https://laporte-gosen.jp/>

○2021年10月2日オープン



ぼたんなど花の名所として知られる東公園との一体的な利活用により整備された、文化振興、産業振興、子どもの遊び場などの休憩施設の3つの機能を併せ持つ複合施設。

地場産業を生かした木の温もりが感じられる建物には、音楽や演劇公演、展覧会、イベント等に対応した約500m²の多目的ホールをはじめ、展示やイベントスペースとしても利用できる開放的なロビー空間「ギャラリー」、バラエティに富んだ遊具を備えた「子どもの遊び場」など、さまざまな施設を備える。

また産業振興エリアでは、市の主要産業であるニット製品や農産物などを取り扱う産直ショップやカフェテリアも運営され、子どもから高齢者まで誰もが気軽に集える交流拠点となっている。

[オープニング事業] 市民による開館記念事業 プラバン全員集合、ラジオ公開収録ほか

[施設概要] 多目的ホール(500席)、子どもの遊び場(179m²)、ギャラリー(552m²)、多目的室2室、産直ショップ、カフェテリア

[設置者] 五泉市

[管理・運営者] まるっと五泉プロジェクト(Fun Space(株))/イオンディライト(株))

[設計者] (有) 香山建築研究所、(株) 鈴木設計企画

●兵庫県養父市

やぶ市民交流広場(YBファブ)

〒667-0021 養父市八鹿町八鹿538-1
Tel. 079-662-0070
<https://www.city.yabu.hyogo.jp/bunka/>

○2021年9月14日オープン



老朽化と耐震性問題が指摘された八鹿公民館と八鹿文化会館の代替施設として整備された、ホールや公民館、図書館、公園としての機能を備えた複合施設。ホール棟と図書館棟の間は立誠舎や旧山陰道、八木川を繋ぐ南北の通り抜け空間(小路)になっており、賑わいや交流の拠点として期待されている。

地元の明延鉦山や中瀬鉦山の坑道をイメージした壁面のデザインが特徴的なYBホールは、開口11.5mの高さを誇るプロセニウム形式で、音響効果に優れながら多目的に利用が可能で、2階には親子観覧室が備わっており、幼児の泣き声も気にせずホールイベントを観覧することができる。養父市に初めて整備された図書館は、採光の良い明るい空間に氷ノ山・妙見山をイメージした独特の書架が並び、ゆったりと読書を楽しむことができる。

[オープニング事業] PACシーズン・オープニング・フェスティバル in 養父市ほか

[施設概要] YBホール(651席)、YBライブラリー、大会議室、音楽スタジオ、リハーサル室、キッズルーム、展示室ほか

[設置・管理・運営者] 養父市

[設計者] (株) 佐藤総合計画

●和歌山県新宮市

新宮市文化複合施設 (丹鶴ホール)

〒647-0011 新宮市下本町2-2-1
Tel. 0735-29-7223
<https://www.city.shingu.lg.jp/mg/12>

○2021年10月3日オープン



旧市民会館の老朽化による建て替えに伴い、東に新宮城跡、北に熊野川を望む旧廃校小学校敷地に新しい文化交流拠点として整備。市民の一人ひとりがまちづくりの担い手として、「人が中心となる」ことを施設の理念とし、市民に愛され親しまれる施設を目指す。

文化ホールは、通常801席から立見席などの利用により、最大1,142名まで拡張可能で、プロセニウム形式ながら客席をすべて収納することで、平土間パターンに転換できるユニークな構造が特徴。そのほか、「熊野エリア」では、熊野の自然や歴史、文化に関する展示のほか、調査研究や情報発信が行われており、充実した郷土資料も収蔵する市立図書館には、芥川賞作家で名誉市民である中上健次の作品や業績を紹介するコーナーを設けている。

[オープニング事業] 大阪交響楽団 ハリウッドスペシャルセレクション〜素晴らしき映画音楽集

[施設概要] 文化ホール、熊野エリア(ギャラリー、研究室、サロン)、多目的室、大・小会議室、スタジオ、新宮市立図書館ほか

[設置・管理・運営者] 新宮市

[設計者] 山下設計・金嶋一級建築設計事務所

見えてきた“これから”の地域コーディネーター

制作基礎知識シリーズ Vol.51

変化する地域と越境する文化の役割

「地域と文化芸術をつなげるコーディネーター インタビューによる事例調査」から

講師 吉本光宏(ニッセイ基礎研究所 研究理事)

*1

・「災後における地域の公立文化施設の役割に関する調査研究—文化的コモンズの形成に向けて」(平成26年3月)
東日本大震災以降の公立文化施設の役割を再考することを目的に実施されたもので、「文化的コモンズ(地域の共同体の誰もが自由に参加できる入会地のような文化的営みの総体)」という概念がまとめられ、公立文化施設はその文化的コモンズの形成に取り組むべきという提言、そのためにはコーディネーターが求められる、という論点が示された。
・「地域における文化・芸術活動を担う人材の育成等に関する調査研究—文化的コモンズが、新時代の地域を創造する」(平成28年3月)
平成26年の調査結果を受けて、全国の5つの文化施設、文化プロジェクトを対象に、「文化的コモンズ」がどのように形成されているかを調査、分析。「文化的コモンズを担う人材、特にコーディネーターの育成・確保が必要」という提言がまとめられた。

*2 調査対象

・長野隆人(いわき芸術文化交流館アリオス 支配人)
・アサダワタル(文化活動家/社会福祉法人愛成会品川地域連携推進室 コミュニティアートディレクター、アーティスト、文筆家)
・小川智紀(NPO法人STスポット横浜 理事長)・田中真実(NPO法人STスポット横浜 事務局長/横浜市芸術文化教育プラットフォーム 事務局長)
・荒井洋文(一般社団法人シアター&アーツうえだ 代表/プロデューサー)
・野村政之(長野県県民文化政策課 文化振興コーディネーター)
・宮城潤(那覇市若狭公民館 館長/NPO法人地域サポートわかさ 理事)

*3 アドバイザー

・小川智紀(認定NPO法人STスポット横浜 理事長)
・野村政之(長野県文化政策課 文化振興コーディネーター)
・若林朋子(プロジェクト・コーディネーター/立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科 特任教授)

令和3年度の地域創造の調査研究は、コーディネーターをテーマに実施された。その背景には、地域創造が過去に行った2つの調査研究がある^(※1)。いずれも「文化的コモンズ」に関する提言が示され、コーディネーターの必要性や育成・確保が重要だという調査結果がまとめられていた。

今回はそれを受け継ぐ形で実施されたもので、報告書に明示されてはいないが、文化的コモンズの形成がこれからの文化行政や地域の文化施設運営の基盤となるべきという考え方が調査研究のベースとなっている。いわば、平成26年、28年調査と合わせ「文化的コモンズ3部作」とも言えるものだ。

具体的には「地域と文化・芸術のつなぎ役であるコーディネーターの活動を具体的に紹介することで、“これから”求められる人材のあり方について考察を行い、課題の整理や目指すべき将来像を検討する」ことを目的に、6組・7名のコーディネーターの調査を実施した^(※2)。

調査研究の実施に際しては、当該分野の専門家3名(うち2名は調査対象と同一)にアドバイザーを委嘱し^(※3)、調査の内容や実施方法、分析や報告書のとりまとめについて、3回の意見交換会を行った。さらに調査対象のコーディネーター、アドバイザー8名が一堂に会した座談会を開催し、調査で浮き彫りになった論点について議論と考察を行った。

紙面が限られるため、本稿では3名のコーディネーターの調査概要を紹介し、調査結果から見えてきたことの要点を掲載する。

◎事例1 市民協働で公立文化施設のあり方を更新する

いわきアリオスの長野隆人さんは、東北地方では最大規模の劇場・ホール施設で、広報の仕事を手がかりに、子育てやまちづくり、市民活動などと連携し、公演やアウトリーチといった従来の事業の枠組みを超えた活動を展開している。

現在は、館の運営や事業を統括する支配人として、市民から寄せられる声や要望に耳を傾

け、館として対応しながら、時には市民に活動の担い手を託することで、市民と協働して公立文化施設のあり方を更新しようとしている。

文化施設の広報は、劇場の事業や活動を市民に伝えるだけでなく、「広聴」の役割を担うべきだという考え方を含め、公立文化施設の方々には、ぜひ参考にしたい事例である。

◎事例2 越境と更新を繰り返すアーティスト・表現としてのコーディネーター

アサダワタルさんは、音楽家としての活動と並行して、全国各地でさまざまなアートプロジェクトやワークショップを行っており、「表現による謎の世直し」をテーマにしたその活動は多岐にわたる。現在は、障がい者福祉のワークショップのコーディネーターを中心に、アートから他分野へ越境しながら「表現」を軸に幅広い活動を展開している。

現場で経験したことを執筆活動として整理し、「表現」の持つ可能性を社会と共有することもアサダさんの重要な仕事で、報告書で紹介した彼の著作も、これからの文化行政やアートの役割について多くの示唆を与えてくれる。

◎事例5 支援と提案で文化政策を転換し、地域の未来へ投資する

長野県内の文化ホールの勤務経験がある野村政之さんは、「公金を文化芸術の創造に上手につなげるには？」を自身の活動テーマにしていた。演劇のドラマトルクとしてアーティストの創作のサポートを行うとともに、沖縄アーツカウンシルのプログラム・オフィサーとして地域の多様な文化芸術団体に支援の対象が広がったことが、コーディネーターの仕事につながっている。

長野県内の市町村を回って地域の文化の担い手を見出し、後押しするとともに、県の行政職員や文化事業団の相談にも対応している。

現在は今年6月に設立された信州アーツカウンシルのゼネラルコーディネーターを務めているが、県の担当者からは「アーツカウンシルを起点に農業や観光、移住、障がい者などの分野につながっていく可能性が開けている」とい

う発言もあり、コーディネーターは、行政施策全般とつながることがわかる。

●文化行政のあり方を問い直す5つの論点

本調査で注力したのは、コーディネーターの実態や成果、将来の方向性を把握するため、コーディネーター本人に加え、関係者から幅広く生の声を拾ったことである。その数は約50名、インタビュー時間は約30時間に及んだ。

そこから見てきたことは、次のとおり、コーディネーターの役割やあるべき姿にとどまらず、これからの文化行政や公立文化施設のあり方を根本から問い直すものであった。

- 文化行政や公立文化施設を取り巻く環境が大きく変化し、従来とは異なる考え方、取り組みが求められていること
- 地域社会における問題や課題が複雑化し、新型コロナがそのことに追い打ちをかけ、顕在化させていること
- 教育、福祉、まちづくりなど、従来の政策分野ごとの行政施策には限界やほころびが生じ、それらの分野をまたがる、あるいはその隙間からこぼれ落ちる問題や課題こそ対応が求められていること
- 文化芸術やアートには、人々に気づきを与え、一人ひとりの行動を促したり、地域に変化を生み出したりするポテンシャルがあること
- コーディネーターは文化芸術に軸足を置きつつ、多様な政策領域に越境して、地域や市民と協働しながら、今日の問題や課題と向き合っていること

●コーディネーターの立ち位置の変化

コーディネーターの役割が注目されるようになったきっかけのひとつは、1990年代後半から各地で活発になったアウトリーチである。文化施設やアーティストと学校や福祉施設などの現場との仲介役として活動するようになり、やがてコーディネーターは文化芸術と教育や福祉、まちづくりなど他の領域とを結びつけるつなぎ手と認識されるようになった。

しかし、今回の事例調査で取り上げたコーディネーターの仕事ぶりを俯瞰すると、文化芸

術と他の領域との間に立って相互をつなぐ、という立ち位置ではなく、文化芸術と他の政策領域や行政課題を地続きのものとしてとらえ、文化芸術を足場にさまざまな領域に越境し、それぞれの地域に根を下ろして市民と共に実に多様な課題と向き合っていることがわかる。

そこで、今回の調査研究では、複雑化する地域の問題や課題に対応するコーディネーターや文化施設、文化行政の役割が大きく変化していることを示すため、調査結果からその変化に対応するための「75の糸口」を抽出し、それらを5項目にまとめたものを「骨子」(*4)として示すことにした。

75の糸口は、調査結果の分析的な記述ではなく、コーディネーターや関係者へのインタビュー、座談会で語られた言葉や発言がベースとなっている。それら一つひとつに重みや深さがあり、これからの文化行政や地域の文化施設への問いかけ、メッセージとなることを重視したためである。75の糸口にはそれらが導き出された事例調査の番号、座談会の掲載ページを記載してインデックスとなるよう工夫した。

ぜひ報告書を手に取って、気になる糸口を手がかりに、コーディネーターのあるべき姿、そして、今後の文化行政や地域における文化施設の方向性を見出していただきたい。

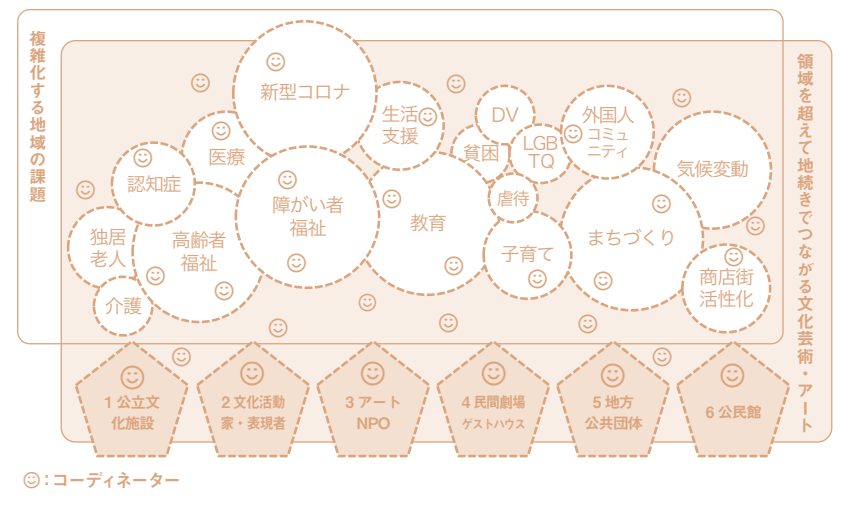
*4 「75の糸口」の骨子

- A. 文化政策・文化行政・文化施設
 - 文化政策には発想の転換が求められている
 - 文化行政の先入観を更新する
 - 文化施設の根本を考え直す
- B. 劇場・創造・文化の場づくり
 - 舞台芸術や文化拠点の持つ力、創造や表現という芸術のコアを大切に
 - 文化の「場づくり」に力を注ぐ
- C. アート・アーティストの役割
 - アートやアーティストは価値観を更新させ、別の思考や行動を促していく
 - アートの目的や機能は課題解決ではなく、地域の基礎体温を上げること
- D. コーディネーターに求められる姿勢
 - 市民や地域をその気にさせる
 - 余白や「ゆるさ」、「聴く力」を大切に
 - もっと雑談・相談・広聴を
- E. コーディネーターの活躍に向けて
 - コーディネーターの位置づけ、役割を考え直す
 - コーディネーターを育成し、新たな評価の視点を持つ
 - 市民活動から市民自治を展望していく

●地域創造の調査研究報告書は、当財団ホームページからダウンロード可能です。

<https://www.jafra.or.jp/library/report>

本調査におけるこれからのコーディネーター



▼— 今月のレポート

財団の支援事業や地域の創造活動に参考になる催しを取り上げて
レポートします

青森県青森市

青森公立大学 国際芸術セ
ンター青森[ACAC]

景観観察研究会 「八甲田大学校」



青森公立大学 国際芸術センター青森[ACA
C]外観(池と野外ステージもある)
青森市市制100周年記念事業として開設さ
れ、2001年12月に開館。建物設計は安藤
忠雄。当初は直営だったが、現在は青森公
立大学附属施設として運営。



篠井宏実+北里大学獣医学部獣医寄生生
虫学研究室の寄生虫標本展示

展示室内には講義ができるスペースが設け
られ、専門家によるレクチャーやワークショ
ップも行われた。また、取材時には森で採
取した実生(種から発芽したばかりの植物)
の鉢植えづくりを行う山本のワークショップ
も行われていた。

● 景観観察研究会「八甲田大学校」
[会期] 2022年7月16日～9月25日
[主催] 青森公立大学 国際芸術センター
青森[ACAC]
[協力] AIRS (アーティスト・イン・レジデ
ンス・サポーターズ)、青森公立大学芸術
サークルほか
[企画] 景観観察研究会+慶野結香(AC
AC)

* 個別に活動する専門家の緩やかな集い・
協働体。今年開催された「ドクメンタ15」(ド
イツのカッセル市で5年に1度開催される現
代アートの祭典)のアーティストック・ディレ
クターにインドネシアのルアンルパというコレ
クティブが抜擢されるなど、さまざまな相互
作用を生み出すそのあり方に注目が集まっ
ている(雑誌「地域創造」47号海外スタディ
参照)。

八甲田山を間近に臨む森の中にある青森公
立大学 国際芸術センター青森[ACAC](以下、
ACAC)でとても興味深い催しが行われた。「八
甲田大学校」(7月16日～9月25日)と銘打って
行われたもので、アーティストと第一線の自然
科学系の研究者などのコレクティブ(*)である
「景観観察研究会(以下、景観研)」が企画。専
門性やジャンルの線引きを軽々と超えたユニッ
クな展示や、元・京都大学総長の山極壽一の
特別講義を含む10種類、19回のワークショッ
プ・レクチャーが行われた。ACACで行われた
景観研の取り組みとはどのようなものだったの
か? 8月14日、現地取材した。



そもそもACACはレジデンスを基軸とした
アートセンターで、広大な敷地内に木工から版
画、写真現像までできる創作棟、キッチンを備
えた宿泊棟、ユニークな半円状の仕切りのない
展示棟を備えている。そうした環境があったか
らこそ今回の企画が実現したとも言えるが、展
示室の設えはすべて地元木材を用いてアーティ
ストの山本修路が木工室で手づくりし、空間全
体が自然を感じさせるものになっていた。

まず入り口には、山本が木材文化の歴史に
思いを馳せてほしいと巨大ノコギリを展示。普
段は版画作品の裏方に徹している摺師の板津
悟は八甲田山の古地図を巨大な石版画のリトグ
ラフにして壁に飾り、展示室中央には画家のO
JUNが公開制作するための作業場が設置され
ていた。取材時は留守だったが、会期中はこの
場所に棲みついて人目も気にせず創作してい
るとかで、描きかけの絵や道具が散乱していた。

ここまでは普通の展覧会でもある景色だが、
八甲田大学校の真骨頂はここから。展示台の
上には瓶詰めされた寄生虫の標本がピラミッド
のように積み上げられ(寄生虫学者の篠井宏
実+北里大学獣医学部獣医寄生虫学研究室)、
ACACの森にあった倒木を蟻や菌類まで含め
て生態系としてそのまま持ち込み(生態学者の
大庭ゆりか)、植物から光がどう見えているかを
コンピューター・シミュレーションした光の展示
(生態学者の伊勢武史)が続く——。専門家の

視線を通して身近な自然や事物を美術と同じよ
うに“見る”ことの面白さ、豊かさに気付かされ
た展示だった。

この景観研の呼びかけ人が、前述の山本だ。
作家であり、十和田市にも拠点をもち、日本酒
やメープルシロップまで手づくりする好奇心の
塊のようなアーティストで、「メンバーは飲み友
だちなんですよ」と笑う。2016年にO JUNが
ACACで展覧会を開いたときにO JUNと出会っ
て意気投合。交流のあった伊勢とO JUNを引
き合わせた。「普通は交わらない画家と研究者
だけど、2人とも人間に興味がある。一緒に何か
やれたら面白いだろうと思った」と言う。

それぞれの人脈からメンバーが広がり、「景
観観察研究会」というチーム名をもつコレクティ
ブが立ち上がった。会の目的や規約などがある
わけではなく、専門領域の話を聞きあう面白
さ、好奇心を活動の原動力としている。そして、
2018年、「それぞれの専門を学びあったり、子
どもに教えたりする“学校”がいいのではないか」
と豊かな自然も工房もあって最適の環境がある
ACACに八甲田大学校の企画を提案する。

担当学芸員の慶野結香さんは、「倒木の生態
展示など驚かれることもあります。施設の周
囲に森があり、いつもそこで子どもたちとワーク
ショップをしたり、アーティストが畑の作品をつ
くったりしている。今回の企画はそういう普段
の活動と地続きになったものだと考えています。
私たちが大切にしているのは、地域の人や学生
がアーティストと出会い、制作に関わる中でこの
地域に表現の種がたくさんあることを知っても
らうこと。景観研はその目的をACACの環境を
存分に活かして実現してくれました」と言う。

景観研の今後の展開について、「アウトプット
が前提ではなく、“見えていなかったものが違う
視点を得ると見えてくる”のが一番面白い。次に
何をやるかは未定ですが、僕たちがお互いの制
作や研究に刺激されて、学びあっていることが、
他の人たちにも波及していくといい」と山本。

違った畑だからこそ学びあえる—— 何とも刺
激的な展覧会だった。

(アートジャーナリスト・山下里加)